

修身小學

重野安禪
丹所啓行
下田啓助
同輯
閱
卷二

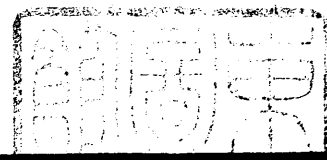
K1101
98
2

重野安綱
所行
丹所
下田
三田
利德
同輯

修身小學

版權免許

集英堂發行
發行所
集英堂



修身小學卷

第一章

重野安綱 閱
丹所啓行
下田利德 同輯

玉不琢不成器
人不學不知道

學所以學為人
也

○玉もみががざを器をなさん。
人も學をざれば道を志らさず。禮記
○學問ハ人となる道を學び習ふ

修身小學

爲めなり。尹焞

○おもしろ人たるもの。聖人のお

しへを貴びて。其道を學ぶべし。大和俗訓

○幼よりつとめ學ぶよ。ひまを惜

むべし。同上

○少きとき心勞むる人。老て後

に樂おほし。同上

志務時敏

○學問を志するに。務めて其志を
へりらだり。手早くして。間後れよ
ならぬやうにせべし。書經

○學の見働ふなり。人のよき意を

見ならひ。之を我身に行ふを。學と

いふ。朱子

○人勤むれば。百事成就して。百福

學之爲言働
也後覺者必
働先覺之所
爲也

人勤則百事
成而百福至

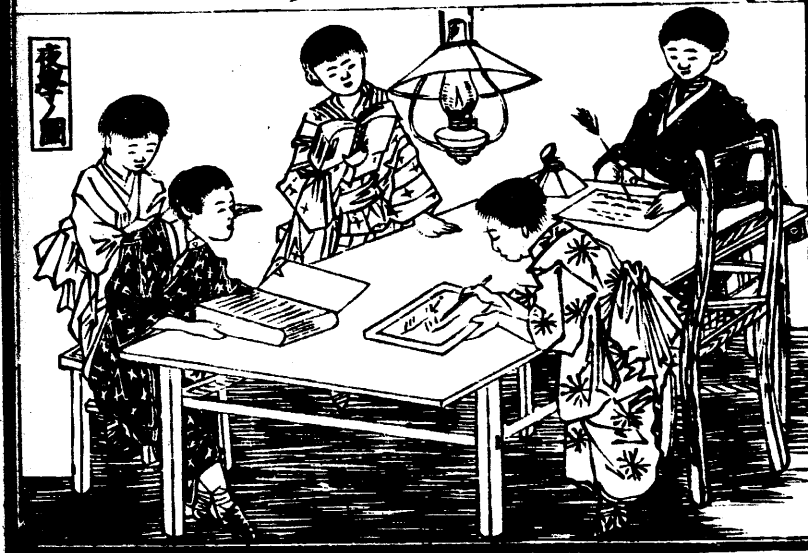
朱子語類卷之三十一

不勤則百事
敗而百禍至

觀書一卷則
有二卷之益
觀書一日則
有一日之益

至る。惰れば。百事
成就せざりて百
禍至る。初學知要

○一卷の書を見
れば。一卷の益あ
り。一日書を見ま
す。一日の益あり。



學問之道無
他。知其不善
則速改以從
善而已。

一事一語必
求知之一善
一禮必學行
之。

倪瓚

○學問の道は他ふあらず。其不善
を知らば。速に改めて善に従ふの
み。程子

○一事一語も。必知ることを求め。
一善一禮も。學んで行ふべし。童子習
○善は小なりとて棄つべからば。

從善如登從
惡如崩

人誰無過過
而能改善莫
大焉

過而不改是
謂過矣

立心以忠信
不欺爲主本

傳身小過 卷之一 大和 俗訓

惡は小なりとて。行ふべからん。過てよく

○善に従ふの難きい。高きふ登る

が如く。惡ふ従ふの易きは。崩を落

るが如し。國語

○人たれり過なりらん。過てよく

あらたむるい。善これより大なる

はあり。左傳

○過てあらためず。これ眞の過なり。
り。論語

○心を立るに。信實にして人を

あざむかざるを本とす。胡瑗

○言を慎み行を慎むを。これ身を

修むるに。最大切のことなり。大和俗訓

第二章

恭而和交友之道也。

寧人負我我不可負人。

責人不知責也。

○恭くして和らぐは。友に交るの道なり。慎思録

○人わきみそむくとも。己まじ人にそむくべからず。陸贄

○人をとがむるも。我身をとがむるも。志るべし。李至

○我身よ才能善行ありとも。口に

出してゐるべからず。大和俗訓

○我の善と悪とを。人の能く志るものなり。同上

○人の悪きこと。我心に知り辨へて。口よ出さべからず。同上

○朋友に悪しき事あらば。面前にていふべし。かげよて誹るべから

病從口入禍
自口出

す。同上

○病は口より入り。禍は口より出
づ。傳玄

○言を出さずも。わが身をかへり
みて。分に過ぎたる事を。いふべ
からぬ。大和俗訓

○謙遜を以て人に接らば。過さく

謙以接人可
以寡過

責人者不全
受自怒者不
改過

なりるべし。薛瑄

○人を責むるもの。交りを全ふ
せぬ。我非をゆるすもの。過をあ
らためぬ。省心録

○君子は己の才能なきを憂ひ。人
の己を知らざることを憂へぬ。論語

○一言妄りに發すれば。後悔立ど

一言妄發則
有悔可不慎

君子病無能
焉不病人之
不己知也

乎

苟輕言戲謔
後雖有誠實
之言亦弗之
信矣

人有禮則安
無禮則危

ころに至る。薛瑄

○一度戲言をせれば。後誠實の言何
りとも。人これを信ぜぬ。畜徳録

○君子は。禮儀を専らよして。争ひ
なす。大和俗訓

○人禮あるときは。其身安く。禮な
きときは。其身危し。禮記

○人の禽獸小異

あるは。禮儀あれ

ばなり。家道訓

○老たるを敬ひ。

少きを侮らばよ

ろづの事。作法正

しく。則を失はざ

孝悌



凡為人子弟
當灑掃居處
之地

凡喧鬧鬪爭
之處不可近

無益之事不
可為
書凡書硯自
點其面此為
最不雅潔切
宜深戒

借入典籍皆
須愛護先有
缺壞就為補
治

人附書信不
可開拆沈滯

與人並坐不
可窺入私書

るは皆これ禮の道なり。初學訓

○凡そ人の子弟と爲てい。居處を

掃除せべし。童蒙須知

○喧争の處みを近くべからざ。無

益の事を爲まべし。同上

○机に書し硯に書し。自ら墨を其

面ふぬる等を戒むべし。同上

○人の書籍を借らば。心を用ひて

大切よまべし。先より破れたる處

あらば。補ひ繕ふべし。顏氏家訓

○人より書翰を托せられしとき

い。假しも之を開封し。又ハ淹滯せ

べからざ。范益謙

○人と並び坐せるとき。人の私

修身小要 卷之三 八

見人富貴不可歎羨誅毀

孝徳之本也

子能以父母之心爲心則孝

大抵爲孝之道愛敬而已矣

父母之尊恩同天地子之報之孝養須至

書を窺ひ見るべからず。同上

○富貴の人を見ては羨み毀るべからず。同上

第三章

○孝ハ徳のもとなり。孝經

○孝子ハよく父母の心を推し量りて己の心とし。范祖禹

○凡そ孝をなはの道ハ愛と敬とのみ。初學知要

○父母の恩ハ天地におなじ。子のこれに報ゆる。十分は孝養を盡すべし。童子習

○父母の心を怡むしめ。父母の身を養ふ。二つの務めかくべし。

家道訓

○父母のいける
とき。力をつく
て孝行まべく。父
母おもりて後。不
孝を悔ゆるとも
益なり。大和俗訓



親孝行

孝子の養老
也。樂其心而
不違其志。

父母愛之。喜
而弗忘。父母
惡之。懼而無
怨。

長者賜少者
賤者不敢辭

○孝子の老者を養ふ。其心を樂
まゝめて。其志またがもげ。曾子

○父母われを愛したまは。喜び
て忘れず。父母われを惡みたまは
ば。懼れて怨むることあり。禮記

○長者物を賜は。少きもの賤き
ものハ。辭退まべからば。同上

父母命唯即
唯而行有業
必投雖臥必
興

父兄長上有
所教督但當
低首聽受不
可妄自議論

○父母呼びたまを直に往ま業
あれバ必ち抛ち臥せといへども
必興くべし。童子習

○父母に對してハ顔色を和らげ
言をたらくせむべし。家道訓

○父兄又ハ長者貴人より訓へ誠
むることあらバ首を低れて聽く

兄弟之愛出
於天性

兄愛其弟
敬其兄勿怨

べし。妄りに議論せむべし。童子蒙須知
○父母も一病あらバ他事を抛ち
て看病し醫藥に心をつくせべし。
六諭行義大意

○兄弟の友愛ハ自然の天性より
以つ。蔡君謨

○兄は弟を愛し弟ハ兄を敬し互

勿怒

凡諸界幼事
無大小毋得
專行必咨稟
於家長

に怨み怒ることなれ。童子習

○凡そ一家の卑幼たるもの大小の事。みな自由に行ふことなく。必家長の指揮を受くべし。温公家訓

○世間の長者貴人を尊敬するは。わが親しき兄よりはトむべし。諭

行義大意

孝弟者身
之本也。若
孝弟雖有他
善行良才不
足觀也。

○孝弟ハ。身を立るの本なり。もし不孝不弟ならむ。他の善行良才ありとも。譽むる不足らば。初學知要

修身小學卷二終

明治十七年七月廿六日出版
同 年九月 四 日出版

定價六錢

編輯人

東京府士族

丹所啓行

東京府士族

下啓助

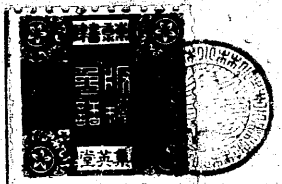
東京府士族

三田利徳

東京府士族

小林八郎

日本橋區通旅籠町十一番地



同 同

出版人

發售處

野洲宇都宮大工町

集英堂支店

修身小學

重野安禪
丹野安禪
下野安禪
三田利徳
同輯

卷三

K110.1
98
3